

『夜明けの嘘と青とブランコ』

著：朝丘 戾

ill：カズアキ

1 青い子どもたち

思い返せば、眞（ま）山（やま）先輩とふたりきりで会うのはいつも夜だった。

左耳にふわりと他人の掌（てのひら）の感触が掠（かす）めて、意識が眠りから現実へ着地した。ゆるく瞼（まぶた）をひらいていくと、視界に真っ先に飛びこんできたのは地面にある青い空。つくりかけのパズルだ。

「—あ、起こしたか。悪い」

ベッドの上で起きあがったら、眞山先輩がペットボトルのストレートティを飲みながらソファに腰かけるところだった。

ソファはこのベッド横のベランダへ続くガラス戸とむかいあわせに設置されていて、手前にテーブルなどはなく、かわりに床におかれたデスクライトとそれに照らされたパズルがある。

半分欠けた晴天の空、嘘っぽい鮮やかな青と雲の白と水鏡。

「先輩、いまぼくの頭撫（な）でましたね」

「寝てるかどうかたしかめただけだよ」

そう、と納得して自分もベッドをでた。先輩の隣に腰かけて、黄緑色のうすいカーテン越しにガラス戸のむこうへ目を凝（こ）らす。まだ夜が深い。

「楠（くす）木（のき）は寝てな。深夜二時だぞ」

「先輩は寝ないんですか」

「ああ……。みんなで呑（の）んで騒いだあとして目が冴（さ）えて」

「普通は疲れて眠くなるんじゃないか？」

「逆なんだよ、俺は」

先輩はパズルに視線をさげて言葉を投げ捨てる。黒くて艶（つや）のある長めの前髪が鬱（うつ）陶（とう）しそう。

数時間前、この人と恋人になった。正しくは“とりあえずの恋人”だ。

大学に進学して散歩サークルへ入り、今夜行（おこな）われた新歓で、ほかの先輩たちにすすめられて俺が受け容（い）れた。先輩はいやそうな顔で『せめて世話係だろ』と拒否していたけれど、終電を逃した俺をひとり暮らしの家へ連れてきてくれて、結局いま、ふたりでこうしている。

「この状況ってぼく、“据え膳”ですかね」

「あほ。……いいから寝ろって」

この人はゲイなのだそう。

—眞山は中学のころに学校でゲイってばれて、転校してるんだって。

—そうそう、こいつ傷心の身なのよ。まだ誰ともつきあった経験ないらしいの。

—楠木君、どう？ 一ヶ月ぐらいでいいからさ、眞山に恋愛の幸せ教えてやってよ。

酔っ払った先輩たちが浮かれて口々に暴露してきた情報はそんなところ。

今年散歩サークルに入った一年がまだ俺だけだから、白羽の矢が立ったんだと思う。でも俺にはそれが別段不快なことじゃなかった。

「楠木」

「はい」

「なんでおまえは俺とつきあってもいいなんて言ったんだよ」

「先輩は特別な人だからです」

眼球だけじろりとむけて睨（にら）まれた。

「……女相手に言うもんだろ、そういうのは」

「女の人はうまく接せられないんで、同性の先輩に恋愛を教わろうと思ったんですよ」

「踏み台かよ。恋人ってそんな遊び半分になるもんじゃないぞ」

「先輩は誰ともつきあったことがないのに、恋愛がわかるんですか」

「殴るよ」

ペットボトルがいきなり目の前に迫ってきた。うつ、と怯（ひる）んで身構えたものの、先輩は「飲みな」とぶっきらぼうにそれをくれただけで、ぶたれたりはしなかった。俺が受けとると、ソファをおりてパズルの前に片（かた）膝（ひざ）を立てて座り、デスクライトの角度を調整する。

「ノリでこっちに踏みこんでくるな。おまえが嫌な思いするだけだから」

色落ちした紺の長袖シャツに身を包む先輩の背中が、たった三歳差でも大人びてたくましい。“こっち”ってというのは当然、同性愛の世界のことなんだろう。

「先輩は、どんな嫌な経験をしたんですか」

ぱち、とピースをはめる音がした。ぱち。……ぱち。

夜のしずけさを裂いて響く、そのかすかな音を聞いて返事を待ったが、彼はなにも言ってはくれなかった。

自分が踏み入っていい他人の心の範囲が掴（つか）めない。……また失敗した。

カーテンの隙（すき）間（ま）に濃（こい）藍（あい）色の暗い夜空が覗（のぞ）いている。夜気はほのかに尖（とが）っていて肌に痛い。

魚の骨が喉に刺さったまま抜けないようなもどかしい鬱（うっ）屈（くつ）が、室内に重くただよっている。

「よう、無断外泊は楽しかったか不良弟」

翌日は土曜日で、午後には帰宅すると兄の恵（け）生（い）が俺の部屋へやってきた。

「無断じゃないよ。母さんにメールしたから」

「そうなのか？ 十一時ごろまで『志（し）生（き）から連絡がこない』って騒いでたぞ」

「十二時すぎにメールした。終電逃したあと」

「あー……まあんなことより、どこに泊まったんだよ。女と一緒にだったんだよなあ、うん？ ラブホ？ それとも自宅？ カラオケボックスでオールとかつまんないこと言うなよ～？」

「家。男の先輩の」

「ははっ、つまんねー」

座椅子に座っている俺の横に、恵生も笑いながら腰をおろしてクッションを尻の下に敷く。

「やっぱ大学いったからって、おまえがいきなり女とべたべたできるわけないか」

テーブル上のチョコクッキーの箱をあけて、恵生が勝手に食べ始めた。俺は恵生のふくらんだ頬を横目で眺めつつ、七歳年上の彼が言う“べたべた”について考える。

「しゃべったらべたべたになんの？」

「そうな、しゃべるだけでもおまえにしては進歩かもな。おはよう、さよなら、みたいんじゃねえぞ。趣味とか男のタイプとか、ちゃんとつつこんだ会話だよ。——昨日の新歓、外泊するぐらい楽しかったんじゃないの？ “眞山先輩”以外とちゃんと仲よくなれたのかよ」

「眞山先輩の恋人になれてって言われてオッケーしてきた」

「は？」

恵生の表情が思い切り歪んだのがおかしくて、笑ってしまった。

大学の入学式で出会った眞山先輩のことを、俺は恵生に話していた。

あの日、かまびすしいサークル勧誘の人波のなかで散歩サークルに興味を持って近づいていったら、『入ってみるか』と声をかけてくれたのが三年生の彼だった。

爽やかな人だな、というのが第一印象。

さらっと長めの黒髪を右耳にかけて淡白な表情と物言いで誘ってくれたようすは、いま思えばなかなか無愛想だったのだが、あの瞬間だけはなぜか、涼やかで清潔で爽やかな人だ、と驚嘆した。春めいた明るい日ざしと暖かい風が、俺たちの周囲に優しくあふれかえていたのも一因かもしれない。

隣には眞山先輩と同じ年の、女性で部長の近江（おうみ）先輩と、男性の曾（そ）我（が）先輩もいた。ふたりは強引で『入ろう入ろう』『みんなで散歩してお弁当食べるんだよ、楽しいよー』とぐいぐい迫ってきたから、戸惑って退いたら、横にいた眞山先輩は眉をさげて大人っぽく苦笑いした。その雰囲気にも惹（ひ）かれた。すぐ傍（そば）ににいるのに俯（ふ）瞰（かん）で見守られているような、超然としていて悪意のない、独特の余裕が心地よかった。

——散歩サークル、入ります。

好みの空気ってあるな、と思う。顔だちや容姿とはべつの、他人がまとっている空気だ。

俺は言葉の選択を誤って人を傷つける質（たち）なので、性格も態度もゆるやかな人が相手だと安心する。傷つけても弁解を聞いてくれそうだと、と本能的に信頼してしまうから。

大学生になったら口下手を克服して社交的な人間になりたい、とひそかな目標をかかっていた俺にとって、眞山先輩は早々に見つけた希望のひとつ星になった。入学式の高揚感も手伝って、散歩サークルでこの人と接するうちに成長できるかもと、なんら根拠のない、夢みたいなまばゆい期待を抱いたのだった。

それも恵生はすべて知っている。

「いやいや、おかしいだろ。恋人ってなんだよ、相手男だよな？」

「眞山先輩はゲイなんだって。それで近江先輩たちが“一ヶ月だけつきあってあげて”って、俺にすすめてきて」

「ゲイだ？ つたって、おまえがオッケーする意味がわかんねえよ」

「先輩とつきあえば社交性もはやく身につく気がしたから」

「いやいやいや、女の苦手意識をなくしていけっつもの。その近江先輩は駄目なのか？」

「近江先輩は違う。眞山先輩をすすめてくる時点で俺をそういう目で見ないのわかるし」

「冷静か。眞山先輩に懐（なつ）いてるのは知ってたけど、おまえゲイじゃないんだぞ。こっちは人づきあいの勉強のつもりでも、そいつはおまえのこと本気で好きになれんだってわかってんのか？ 掘られるぞ？ ……って、まさかも掘られてるとか言わないよな」

「ないよ。眞山先輩には拒否られてる」

大学生活が始まって約二週間。まだ同期にはあたり障りない会話をする仲の人しかいない。

でも散歩サークルは活動をしなくてもサークル室に集まって散歩計画会議と称したお茶会をしているので、積極的に出席してきた。上級生のための輪に加わるのは容易じゃなく、テンパって無口になりがちな俺をさりげなく助けてくれるのはやっぱり眞山先輩だった。

先輩は今週二十一歳になる四月生まれ。実家がコンビニエンスストアで、その上階のマンションも管理しているから、一室借りてひとり暮らしをしつつ店を手伝っている。

俺が先輩たちの会話を聞いて得ていたそれらの個人情報に、新歓があった昨夜、ゲイ、中学のころの転校、傷心の身、が増えた。

いまのところ純粋に“知りたい”と心惹かれるのも眞山先輩ぐらいしかいない。恋人なら手っとりばやく親密な関係を築けるし、どうせ期間限定だ。自分にはいい経験になると思う。

「はあ……拒否ってる眞山先輩だけがまともだわ。一あのな、志生。中学ンときのおまえの失敗は、おまえがゲイになったって解決しねえんだよ。当然だろ？ どうせ酒の席でのばか話なんだし、真に受けてないで適当に流しとけよ。そんで女とつきあって大学生活謳（おう）歌（か）するの、わかったか？」
ロンなかかがクッキーでばさばさんなった、と悪態ついて、恵生は俺の紅茶を飲む。

中学のときのおまえの失敗、という恵生の言葉が胃の奥に針みたいに突き刺さってひき攣（つ）れた。抜けない針だからこそ、俺は希望に縋（すが）りたかった。

「恵生。恋人ってなにしたらなれるの。キスしたら？ セックスしたら？ いまから恋人ねってふたりで口で約束したら？」

社会人三年目の恵生には、大学時代からつきあっている理（り）沙（さ）さんという彼女がいる。

「ははははっ」

真面目に訊（き）いたのに恵生は爆笑した。一階にいる両親にも届きそうな大声で。

「お兄ちゃんちょっと安心したわ……」

頭を無造作に撫でてわざとらしく子ども扱いされ、むっときてその手をふり払ってやった。

午後の講義が終わった室内の前方で、男女の輪ができています。

「じゃあさ、来週みんなだバーベキューしようよ」

「おっ、いいね！」

「連絡するから携帯メール交換しよ〜」

「オッケオッケ。メールもいいけどさ、なんかSNSやってる？」

「やってるやってる」

「じゃそっちでも繋（つな）がろー！」

……ああいう輪を見ていると、自分はコミュ障の根暗な奴なのかなと情けなくなってくる。

昔はどうしていたっけな。友だちがいなかったわけじゃないのに、以前と違って話しかけたり遊びに誘ったりするタイミングが、いまはどうしてもうまく掴めなかった。

けど携帯メールも交換していない相手とバーベキューに行くのはしんどいし、俺SNSしてないし。たぶんあの人たちとは馬があわないだろうから、またべつこの相手を探せばいいか。

講義室をでて、サークル室へむかった。廊下のガラス窓越しに春の午後の黄金色をした光が満ちていて、暖かくて眩（まぶ）しい。サークル室では、今日も誰かしらお茶をしているに違いない。眞山先輩はいるだろうかと考えて、彼の顔が脳裏を過（よぎ）るとすこし安（あん）堵（ど）する。

「こんにちは」

「お、楠木君お疲れー。ほれ眞山、あんたの彼氏きたよ」

「やめろ近江。——楠木お疲れ」

「ぶっふふ」

サークル室は狭い。ドアをあけると中央に三人がけの長テーブルが縦にふたつならんでいて、その左右を背の高い本棚が占領しているから、圧迫感もあって息苦しかった。かろうじて真正面の一面のガラス窓が換気と景観美に役立ってくれている感じだ。

奥を陣どっている近江先輩は携帯電話をいじっており、左側にいる曾我先輩は漫画雑誌を読んでいる、右側にいる眞山先輩はタブレットPCを操作して眺めている。テーブルの真んなかには近江先輩が持ってきたのであろうシュークリームと、全員ぶんの食ベカス。

この場合どこに座るのが正しいんだろうと逡（しゅん）巡（じゅん）して、まあ、うん、とひとり納得し、眞山先輩の隣へ腰かけた。

近江先輩が意味深ににやっと笑んで「楠木君もシュークリーム食べな」とすすめてくれる。「すみません」と軽く頭をさげ、緑色のクリームがはみでている抹茶味のそれをとった。

俺だけ黙々と食べるのもなんだ。視線をあげると目の前には漫画を読んでいる曾我先輩の真剣な顔。男前で剛健でチンピラっぽい彼は、新歓やサークル勧誘では不（ぶ）躰（しつけ）に他人を巻きこんで場を盛りあげていたのに、普段は“お疲れ”の挨拶もしてくれない温度差が謎すぎる。

近江先輩もペットボトルのジュースを飲みながら携帯電話をいじっている。肩までの焦茶色の髪と、液晶画面をタップしづらそうなネイルの細い指。

眞山先輩だけタブレットで公園や庭園を検索していた。……真面目で健（けな）気（げ）だ。

「そのバラ園、綺（き）麗（れい）ですね」

話しかけたら、一瞬俺を見返して「ああ」とうなずいた。

「ここは入場料が必要だけだな」

「いくらですか」

「五百円」

「お、おー……」

「なんだよその反応」

「高いのか安いのかわからなくて」

はは、と眞山先輩が笑った。

「無料で見られるところもあるよ。近場だったら代（よ）々（よ）木（ぎ）公園とか日（ひ）比（び）谷（や）公園とか。でもバラはこれからシーズンだから混むかな」

「ふうん……」

詳しいんだな。花の話をしてくれる男なんてとてもモテそう。

噛みつくたび抹茶クリームがこぼれそうになるシュークリームに苦戦しつつ、タブレットを覗き見していると、眞山先輩が「ぼっちいな」とそばにあったティッシュの箱から一枚抜いて俺にくれた。

「すみません」と手を拭（ふ）いたら、

「口の端だよ、ここついてる」

と、自分の右頬のあたりをつついて教えてくれる。しめされたところを確認して拭いてみると、「そうそう」と苦笑いしてうなずいてくれた。八の字に歪む眉と、優しくたわむ二重。見つめていると魂ごとすうと吸いとられそうになる眞山先輩の苦笑いは、相変わらずシュークリームより甘い。

特別ハンサムってほどでもない適度に整った顔だちなんだけど、どうしたわけか見（み）惚（と）れた。造形が好みなのかも。それとやっぱりこの空気。ほかの誰とも違って、近づく隙をくれる。

「楠木はバラなんか興味ないか」

「え」

なんでそうなる？

「商店街のほうがいいかな。都内の華やかなショッピングモールっていうんじゃなくて普通の商店街なんだけど、面白い店がならんで有名なのところがあるんだよ」

「はあ」

「戸（と）越（ごし）銀（ぎん）座（ざ）なら聞いたことない？ 東京一長い商店街で、コロケとか食べ歩きするのが楽しいんだってさ」

「……あの、」

「横浜中華街の近くにもあって、そこはキムチ売ってる店が多くて種類も豊富でね。まあ散歩っていうよりほんとに食べ歩きになっちゃうけど」

「先輩」

話をとめるのは悪いかと思いつつ強く制した。

眞山先輩は不思議そうに「え？」と停止する。

「ぼく、バラも嫌いじゃないですよ」

「……あ、そう？ 興味なさげじゃなかった？」

「ありました、興味」

「……。そう。べつにそんな意地にならなくていいぞ」

「誤解されたくなくて」

「わかったから睨むな」

「睨んでません」

「睨んでるって」

ぶっ、と吹きだしたのは近江先輩だった。

「やっぱりいいコンビだねえ」

眞山先輩が目を眇（すが）めて不愉快そうに近江先輩を見返したが、近江先輩は笑顔でながす。

「ねえ、楠木君はどうしてうちのサークルに入ってくれたの？そこんとこちゃんと訊いてなかったよね」

「歩きたかったからです」

「ん……？ああ、徘徊（はい）徘徊（かい）が趣味みたいな？」

「いえ、えーと……知らない町を、自分の足で、歩きたいんです」

「ほう、冒険好きってことだ？」

「えっと、はい。内向的なのを、なおしたいと思って」

「うんうん。じゃあ眞山とつきあうのもいい冒険だね」

おい、と眞山先輩が割りこんだ。

「どうしてそうなるんだよ」

「いいじゃん」

「よくない」

「楠木君可愛くって最高でしょ。あんたにはもったいないぐらいだよ」

「あほか」

「そーやって頑（かたく）なにしてくからいつまで経（た）っても独り身なんだってば。——聞いてよ楠木君、こいつ好きな相手と手繋いだこともないんだよ。かわいそうでしょ～？二丁目いくとかネットで探すとかなんか行動おこしいのに、どーも潔癖なんだよねえ」

「余計なお世話だよ、ぺちゃくちゃしゃべんなっつ」

「えー全部眞山君に教わったことですよー」

「あーあー、もうおまえにはなにも話さねえよ」

「ひっど！」

眞山先輩と近江先輩が「あんたのためを思って言ってあげてんでしょー」「どこがだよ」と言い争い続ける。

眞山先輩がゲイだと知らなければ、ふたりこそ恋人じゃないかと疑いたくなる仲のよさだ。俺はシュークリーム最後のひと口を食べる。

そのとき近江先輩が持っていた携帯電話が鳴り、「あ、ちょっとたんま」と会話をとめた。シュシュツと指を素ばやく動かして文字をうち、「あーもうっ」と苛（いら）立（だ）たしげに息をつく。

「メールってまじ面（めん）倒（ど）い。すぐ返事しないとキレられるしさあ……眞山と違って彼氏がいても苦労は絶えないわー」

「はいはい、らぶらぶでよかったですね」

「らぶらぶっつーのかねこれ。便利だけど、会って話しゃいいじゃんって思っちゃう。既読機能のせいで変な喧嘩になったりするし誤解も多いし、そもそも味気なくって嫌いなんだよね」

「味気ない？」

「うん、このデジタル文字が。昔授業中に手紙まわしたりしたの楽しかったなー……小学生のときには交換日記が流（は）行（や）ったんだけど、あれ思い出つまってていまだに大事にしてるしね」

「メールのおかげで会話は増えてるんじゃないの」

「まあそれもそうなんだけどねえ、手紙と電話のほうがわたしは好きだな。——あ、そうだ。眞山と楠木君も交換日記すれば？」

「は？」

近江先輩の無邪気な提案に、眞山先輩がまた目をむいた。

「いいじゃんいいじゃん、おたがい言えないこと教えあえばすぐ仲よくなれるよ。一ヶ月なんてあつという間なんだから有効活用しなくちゃ」

「おまえどれだけ俺らをからかえば気がすむんだよ」

交換日記か……。たしかに長文送信が憚（はばか）られるメールや、一方的に送る手紙よりいい手段なのかも。メールは変な誤解や喧嘩を生む、という近江先輩の言葉も重く響いた。

「からかってないよ、ほら楠木君もまんざらじゃないって顔してるよ？」

「はあ？」と眞山先輩が俺をふりむく。

「おまえまでノせられんなよ」

釘を刺されて俺が言葉につまったら、近江先輩が「あはは」と笑った。

「楠木君は優しいなあ。ほれ、シュークリームもう一個お食べ」

「はい……」

曾我先輩だけは知らぬ存ぜぬで、楽しげに漫画を読み続けている。

四時をすぎて近江先輩が「彼氏が待ってるからいくー」と帰ったあと、曾我先輩を残して俺と眞山先輩も帰宅することにした。

「バラ園にいくって、ぼくらで決めてよかったんですか」

結局ずっと眞山先輩とタブレットを眺めていて、次の散歩計画をかためてしまった。

「一応近江にも確認とるけど大丈夫。コースはいつも適当だから」

「はあ」

「場所よりいくことに意義があるんだよ。目的地は教えなくて言う奴もいるし」

「ああ……」

「今回は新入りの楠木の希望にこたえていいだろ。弁当なに作ろうかね。楠木も考えとけよ」

「……はい」

眞山先輩がなにか思うところありげな表情をして、俺の顔をうかがいながら正門をとおりすぎた。俺は首を傾（かし）げて歩調をあわせ、遅れないようについていく。

「楠木、べつに毎日サークル参加しなくてもいいんだぞ。俺と近江と曾我は暇持てあましてるからアレだけど、ンな義務も決まりもないんだから。おまえも同級の友だちと遊べよ」

「はあ……」

「なに。まだ友だちいない感じ？ それならなおさらだろ」

返す言葉もない。

駅までは満開の桜並木が続いている。花びらが雪のように舞ってアスファルトへ降りつもり、いつもは灰色に沈んでいる道路があでやかな桃色の色彩で輝いている。

「女だって、苦手って言ってたわりに近江とはちゃんと話せてるじゃないか」

「近江先輩は、幼稚園の先生とか看護師さんみたいな感じなんで」

「仕事で面倒見てくれてるって意味？ ……おまえそれ絶対本人に言うなよ」

「違います、おたがい礼儀と気づかいの適度な距離があるから平気って……そんな意味です」

「馴（な）れ馴（な）れしいと駄目なのか」

「まあ……うん、はい」

「切れの悪い返事だな」

「馴れ馴れしいのもありがたいんですよ。ただ馴れ馴れしさにも種類があって、心地いいのと悪いのがあるから」

「あー……」

「うまく説明できる人間なら友だちがいたと思う」

「いやいや、拗（す）ねるなよ」

拗ねてませんよ、拗ねてるだろ、と二回応酬して最後にふたりで苦笑いした。

足もとに視線を落としたら、歩道に敷きつめられている桜の花弁が夕日色に染まっていた。眞山先輩の顔や服や指も、温かくてまるみを帯びた橙（だいだい）色（いろ）になっていて、どこことなく物憂い。

「……眞山先輩。先輩が“サークルにくるな”って言うのは、ぼくが邪魔だからですか」

「邪魔？」

「三年の先輩たちのなかに一年のぼくがいると、扱いづらいのかと思って」

「ばかだな。おまえが俺らにあわせて無理してたらかわいそうだなって心配しただけだよ」

訊きづらいことを口にできたり、自分の欠点を見透かされたりしても焦（あせ）らずにいられるのは、やっぱり眞山先輩のこのフランクな態度や寛容な性格のおかげだな、と感じ入る。

この人は俺がなにを言っても許してくれるし、誤解したまま激怒して去ったりしない。

「……フィーリングっていうんですかね、こういうの。ぼく、相性があわないっていう直感に敏感なんです」

「ん？ どうした、なにかあったのか？」

こうやって思慮のある言葉を自然とかけてもらえると、俺もつい頼りたくなってしまふ。

「さっき講義を終えたあと、バーベキューにいこうって話してる人たちがいたんです。ああいうの自分は無理だなってなっちゃって」

「なんでよ」

「携帯メールすら交換してなかったような、なんにも知らない仲だったんですよ。一緒に料理したり呑んだりして、まるまる一日過ごすってハードル高いじゃないですか」

「一日過ごすして知りあっていくんじゃないの？」

……そうだけだ。

「どんなものが好きか嫌いか、愉快か不快かもわからない相手と長時間いたら、ぼくはものすごく気をつかって愛想笑いして、疲れます」

「考えすぎだって。気がひけるのもわかるけど、最近はみんなそんなもんだろ。参加してみたら案外楽しめるんじゃないか？ 楠木はちょっと保守的すぎるよ」

はは、と笑われて、ついカッとなった。

「ああいう軽いノリで生きてる人たちが、ぼくは苦手なんです」

“おまえは世間と闘ってない”と茶化された気がして悔しかった。

「ぼくは、軽くメール交換して軽く外食して軽く相談のって軽く友情語って軽く疎遠になって、それで寂しくもないような、雑な人づきあいしたくないんですよ。だってそんなの時間の無駄じゃないです」

か、脳みそ軽いばかりのすることだっ」
周囲を包む綺麗な景色にふさわしくない、汚い反論が口からどろりとでた。
「ばかなのは俺だ、と我に返って、動揺して焦って恐る恐る眞山先輩を見返したら、彼も瞳（どう）目（もく）している。
「.....おまえがそういうこと言う奴だと思わなかったよ」
失敗した――。

自宅の最寄り駅につくと、駅ビルにある文具店へ寄ってノートを買った。
交換日記に使用するノートはどんなものが正しいのかわからず、そっけない大学ノートと、女の子が好みそうな可愛い絵柄のノートとを手にして見比べながらしばらく悩んだが、結局、変な冒険はやめて大学ノートを選んだ。
B5サイズで三十枚。
このページがどこまで埋まるんだろう。
――適当なこと言ってんじゃねえ。おまえみたいにいい加減な慰め言う奴が一番腹立つわ！
数年前記憶に焼きついた怒声と相手の厳しい形相に、くり返し責められて焦りが募る。あんなふう
に人を傷つけたり失ったりするのは二度と嫌だ。
店をでると家に帰って早々に机へむかった。
ペンを持って、真っ白いノートにひかれた淡（あわ）藤（ふじ）色の罫（けい）線（せん）の一番上
に“眞山先輩へ”と書いてみる。その瞬間にいたり、ああそういえば俺は眞山先輩の下の名前を知らない
な、と、はたと気がついた。

眞山先輩へ

こんばんは、楠木です。
交換日記を書いています。

近江先輩にすすめられたときはすこし興味を持っただけでしたが、書くことにしました。
文章はうまくないので、わかりづらかったらすみません。それでもたぶん、口で話すよりましなんじゃないかと思うんです。できれば最後まで読んでください。

今日の帰りはすみませんでした。
ぼくは中学のとき軽薄な言葉で友だちを傷つけて、謝ることができないまま卒業しました。
それが忘れられずにいるせいで、人づきあいのしかたもわからなくなっています。

さっき先輩を失望させたあとも、ずっと考えていました。
いま思えば、先輩に言われた保守的って言葉が凶星だったから、ぼくは反発したんです。
バーベキューの人たちのことも、上から目線で見くたすことで虚勢をはって、自分の弱さを正当化しました。汚くてすみません。

ぼくには兄がいるので、おなじように年上で優しい眞山先輩とは接しやすいです。
つまりそれは、甘えているってことです。
昔みたいに、先輩ともこのまま切れてしまうのが怖いです。
これを読んでもらったあと、改めて謝らせてください。
お願いします。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>